

エンカウンター（ENCOUNTER）

第 126 号

平成24年10月20日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西2-14-28 山口周三

電話 080-1232-0905

<http://encounter.agape.gr.jp/>

小西芳之助「ローマ人への手紙 講解説教」より（5）

第13講 ユダヤ人の罪（2）

自分は善人だと思ったら間違い

諸君！ 注意し給え。我々は本当に自己に死ななければ、すなわち、神様に永遠不滅の生命を持つ者にして頂かなければ、我々は我利我利亡者だと見て差し支えない。我々人間は、非常にセルフイッシュで、非常にわがままです。自分のことは善く見えて、他人のことは悪く見えます。例えば、自分はこれだけあの人に親切にしているのに、なぜあの方は自分に不親切なのか、自分はこれくらい夫に尽くしているのに、なぜ夫は自分を大事にしてくれないのかと妻はいうでしょう。どんな善人でも、非常にセルフイッシュです。自分は非常に自己中心的な人間だと思っていれば間違いありません。自分は、少しは公平な判断をする人間などと思ったらいけません。パウロは、死ぬ前に「我は罪人のかしらなり」（テモテ前書1章15節）と言いました。自分は善人だと思ったら間違いです。自分は、少しは善行しているなどと思ったら、それは大間違いであります。永遠の生命を知り、来世が見えた時に、我々は自分の本当の姿が見えて来て、このような聡明な見方ができる。永遠の滅びから救うということ、これが聖書の中心問題であります。聖書全66巻は、このことを

論じています。

私は、内村先生、ミス・モークを通じてキリスト教を学びました。そして、来世のことを教えられました。来世のことは、自分で考え得ることではありません。私は、この両先生に恵まれたことを感謝します。また私は、日本語では内村先生、英語ではサンデー先生とヘッドラム先生、ドイツ語ではパウル・アルトハウス先生、この4人の先生の注解書からロマ書を学んでおりますけれども、これらの注解書を読み比べましても、来世に対する理解の深さという点では、内村先生のロマ書の注解をもって最上と考えます。

私は、パウロ先生の来世に対するこの深い理解を書いたロマ書の最も優れた注解書は、日本人の手によってなるものと確信します。

(P.124)

第14講 人類の罪(1)

罪の理解と福音の理解は裏表

そもそも、人間が罪人であること、すなわち、我々が罪人であること、これが根本の問題です。宗教というものは、我々の罪の問題の解決であります。ですから、神の真理の光に照らされれば照らされるほど、我々は自分が罪人であることを知らされ、それに応じて、聖書が説いているイエス・キリストの救い、すなわち、贖いが分からされるわけであります。ですから、罪の理解と福音の理解とは裏表をなしています。罪の理解のない所に福音の理解はない。ですから、どうしても、福音を理解するためには、万人が罪人であるということ、すなわち、自分が罪人であるということ、自分が滅ぶべき者であるということ、我々は神によって知らしめてもらう必要があります。しかし、このことは、不幸にして人間は自分では分かりません。ですから、自分が罪人であるということ信じざるはかありません。

キリスト教の深い真理が分からないのは、自分が罪人であることが分からないからであります。我々が教会で読みます使徒信条の中心は、「罪の許し」にあります。主の祈りの中心は、「わが罪を赦し給え」にあります。この点に触れてこない間は宗教とは言えない！この点に触れてこなければ、永遠の生命は分かりません！福音は「我は罪人なり」という、この土台の上に立っています。これが、福音を信知する基礎であります。

(P.132)

第15講 人類の罪(2)

聖霊は徐々に下る、力は歳と共にます

聖霊を受けるまでは、パウロ先生もサウロという名の旧約の大学者で、イエス・キリストを迫害しておりました。12使徒も、聖霊を受けるまでは、あの復活の朝、女たちから主の復活の目撃の報告を聞いても、これを愚かなこととして信じなかった。しかし、彼らに聖霊が降った時、彼らには、首がちぎれても、このイエスの福音を宣べ伝える勇気が出て来ました。我々には、ダマスコ途上におけるパウロのように、あるいは12使徒のペンテコステのように聖霊は降らないにしても、我々にもまた、内村先生の言葉のように、「終生、徐々に我らの上に聖霊は降る。力は歳と共にます」のであります。我々も忍耐をもって聖霊に降るのを待って、「自分は罪人である」というこの真理を、真に知る者とされたいと思います。

パウロは「罪人のかしらなり」と言いました。内村先生も、罪人であって、罪人のままで、贖いの力により、主の名を呼びつつ、御国へ帰りたいたいと思います。聖書の真理に堅く立つ時に、本当に、我々自身の問題の根本的解決があります。そして、自分が罪人であるというこの真理は、ロマ書に詳しく説かれています。本論の冒頭、1章18節から3章の20節まで、ロマ書の最も大事な最初の3章を費やして、この万人罪人の真理が説かれています。

諸君！いかにこの真理が重大であることを認識する必要があります。

聖書の真理を教えてくれる人を、教師という。キリスト教の牧師は、聖書の教える霊的真理を人々に教えるものでなければなりません。ただ信者の悲しみを取り去るとか、苦しみを慰めるとかにのみ心を用いるべきではない。牧師は、第1に、この万人罪人の真理を、まず自身が学び、そして信者に教えるべきであります。福音の真理をまだ信知出来なくても、もしこの真理だけでも本当に信知させて頂ければ、人は自ずから謙遜になって、人と人との間に本当の平和が生まれてきます。ただ信者の苦しみや悲しみを癒すことのみを努め、また信者のご機嫌をとっているようでは、キリスト教の牧師としては恥ずべきであります。我々教師は、大いに猛省したいと思

ます。

(P.138)

第 16 講 律法的能力

自分が罪人であると信じる信仰

「私は罪人であり、自分の道徳では救われず、地獄へ往く者である」と分からせてもらうのが、キリスト教の始めであります。大抵の人は、自分は善行はしていないが、大して悪いこともしていないと思っています。それを責めるのは無理かもしれません。しかし、自分は罪人だということが分かる時が必ず来る。それは、神の霊が我々に降る時です。

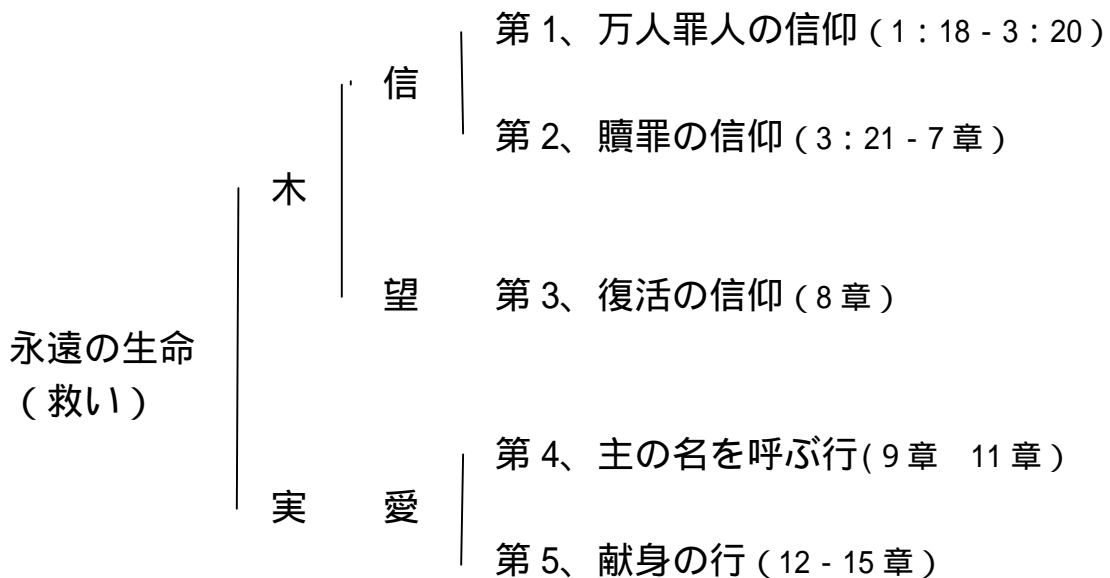
自分が罪人だと分かる方法は、自分が罪人であると信じる信仰によります。何遍も言いますが、我々には、自分が本当に罪人であるということが分からない。ですから、聖書に、我々は罪人であって、キリスト来給う時に永遠に滅ぶべき者であると書いてありますから、我々はただそれを信じるのです。イエスは「だれでも幼な子のように神の国を受け入れるものでなければ、そこにはいることは決してできない」(マルコ伝 10 章 15 節)と仰せになりましたが、この原理は、この場合に直ちに当てはまる。この第 1 の定理をマスターする方法は、「信仰」です。自分は罪人であって永遠に滅ぶべきものだと聖書に書かれているから、その通りだと信じる。我々罪人に許されている方法は、この信仰の一手しかない。そして、そのように信じれば、キリスト教の深い真理が展開してきます。

(P.148)

第 17 講 神の義 (1)

ロマ書全体の真理の一瞥

1 章 18 節から 3 章 20 節までで、我々が滅ぶべきものであることを学びましたが、これが「万人罪人の信仰」であります。3 章 21 節から 7 章の終わりまで、これが「贖罪の信仰」であります。これを福音と言います。ロマ書全体が福音であります。この贖罪が福音の中心的内容であります。それから、8 章は、「復活の信仰」になります。そして、8 章までで信仰の部は終わり、9 - 11 章では、「主の名を呼ぶ行」、これからが「行い」に入ります。すなわち、「我が主イエスよ」と、主の名を呼ぶ行が書かれています。この行について、内村先生は詳しくは説明されませんでした。先生はこれを後からくる者にお譲りになったものと思います。次に、12 - 15 章が「献身の行」、すなわち、我が身を献げる行であります。これを簡単に言えば、毎日目の前に来る義務、それをなすこと、これを献身の行と言います。



以上の 5 つが、ロマ書に含まれている霊的真理であります。前回すでに申し上げたように、私はこれらを幾何学の 5 つの定理に譬えています。この 5 つの真理を体得できたならば、すなわち、この 5 つの定理を自由に使うことができたならば、人生のいかなる問題も

解くことができます。

(P.151)

律法道德とは無関係に

しかし今や、神の義が、律法道德とは別に、しかも律法と預言者によって証されて、あらわされた。(ロマ書 3 : 21)

内村先生は、大正 10 年(1921 年)5 月 15 日、この箇所をご講義になり、「律法、道德とは無関係に、」と言われました。その時、私は強烈な感動を覚えました。我々の心の状態、我々の行いの状態には寄らない、ということが分かりました。その時初めて、私は福音の意味が分かったのであります。それ以来、既に 50 年がたちましたが、この確信は少しも動くことなく、私の福音理解の根底になっております。

救いは、我々の心の状態、我々の行ないの状態には一切よりません。律法、道德、宗教、そのようなものとは一切無関係にであります。次元が違う。我々人間が住む世界を 3 次元とすれば、神の義、救いというものは、4 次元の世界に現わされたと言う。しかも、その 4 次元は、この 3 次元を含んでいると言う。そして、そのことは、律法と道德がそれを証明しているというのです。...

律法や道德によって、人には罪人であるという自覚が起こってきます。こうして、律法は、この福音、神の義を準備して、福音に追いやる。そしてまた預言者たちは、この神の義が現われるぞ、救い主が現れるぞ、ということを預言しています。ですから、律法と預言者、すなわち、旧約聖書の全体は、この神の義を証明していると言うのであります。内村先生は、「旧約は旧き新約にして、新約は新しき旧約である。旧約の中に新約は未完成の形に於て、その萌芽に於て存し、新約の中に旧約は完成の形に於いて、その美わしき成熟に於いて存している。」と言われました。また内村先生は、日本の浄土門の仏教も、この神の義を証明していると言われました。...以上が、この 21 節の大体の意義であります。

(P.155)

大正 10 年 5 月 15 日の内村先生の日記

この大正 10 年（1921）5 月 15 日の内村先生の日記は、『内村鑑三全集』に出ています。

「5 月 15 日、日曜日、晴れ。愁ひの雨は夜の中に晴れて、新緑輝く美はしき涼しき初夏の聖日であった。中央聖書講演会は常時に変らざる盛会であった。黒崎と講壇を共にし、同じ問題に就いて語った。ロマ書第 3 章 21 節が此の日の研究の題目であった。「しかし、今、律法を全然離れて神の義は顕はれたり。然して律法と預言者とは之が証明をなせり」といふパウロの福音の真髓に就いて語った。自分ながら非常に愉快であった。この福音をこの日此の所に於て唱へて世の生涯の目的が達せられたやうに感じた。何を為さずともこの福音だけは唱へずには居られない。人生何事か之に勝るの快事あらんやである。大感謝である。」

私は、この日、先生のこの御説教をこの耳で聴くことができたことは感謝にたえない。50 年の歳月は経っておりますが、昨日のよう感じます。

内村先生は、ご自分の奥さんである静子夫人を紹介するのに、「家内は何にもできないけれども、三度僕と共に餓死を決心してくれた。褒めてやってくれ」と言われました。また先日、金沢常雄先輩の奥様からお聞きしたことでありますが、大正時代に金沢夫人が神学校に行っておられた頃、ある夏休みに、藤井武先輩のお宅に 2 カ月ほど滞在された。その時、藤井先輩の家では、朝食には芋の粥を食べておられた。その頃、金沢先輩の奥様は学生でしたから、無邪気に「ああ、芋の粥は美味しいな」と言って食べておられたそうです。家に帰ってお父さんにそのことを伝えたら、「先輩の家では、米の飯が食えないから芋の粥を食べておられるのだ」と言われたそうです。このように、我々の先生や先輩は、福音を伝えるために、命がけで、文字通り困苦欠乏に耐えて、食べるものも食べずに、この福音を伝えたのであります。

（P. 156）

第 18 講 神の義 (2)

それは、イエス・キリストを信じる信仰による神の義であって、すべて信じる人に与えられるものである。そこには何らの差別もない。 (ロマ書 3 : 22)

ロマ書 3 章 22 節の読み方

この 22 節前半は、口語訳では、「イエス・キリストを信じる信仰によるの義」と訳されていますが、原語では、ここの「よる」という前置詞、すなわち、英語の「by」とか「through」に当る前置詞と、それに続いて「イエス・キリストの信仰」と書いてあるだけです。「イエス・キリストの信仰」と言えば、いつも言っている通り、「の (of)」という前置詞は、主格の意味をあらわす場合にも使われるし、また目的格を表わす場合にも使われます。...口語訳聖書では、「イエス・キリストを信じる信仰による神の義」と、目的格の意味に訳しています。しかし、私はこの訳をとりません。私は、これを「イエス・キリストが所有し給う信仰による神の義」と、主格の意味に訳したい。この解釈は、...我々の祖先、すなわち、仏教浄土門の恵心や法然、親鸞の信仰をもってこの箇所を読めば、それを信仰と読む以上は、「イエス・キリストが所有し給う信仰」と、イエス・キリストを主格に読まねばならないことが分かるのです。これは、私の勝手な解釈や説ではありません。恵心や法然、親鸞の信仰をもって読めば、このように読まなければいけない。これは、語学の問題ではありません。信仰の問題です。私は、恵心僧都の信仰によりまして、ここを「イエス・キリストが所有し給う信仰」と主格に解釈します。 (P.159)

イエス・キリストが所有し給う忠実

さらに、「信仰」という字は、原語では「忠実」という意味もあります。これは、信仰とも訳せますし、忠実とも訳せます。ですから、「イエス・キリストが所有し給う忠実」とも訳せます。そして、この「イエス・キリストが所有し給う忠実」とは、イエスが一生涯神に忠実であられ、十字架を負うて贖いを成就して復活されたのですから、「イエス・キリストが成し遂げられた十字架の贖罪に至る忠実」であります。ですから、これを端的に解釈すれば、「イエス・キリストの信仰」、「イエス・キリストの忠実」は、「イエス・キリストの十字架の贖い」を意味することになります。すなわち「イエス・キリストの持ち給う信仰による神の義」とは「イエス・キリストの贖いによる神の義」の意味であります。したがって、私は、この「イエス・キリストの信仰による神の義」を、「イエス・キリストの贖いによる神の義」と訳したいと思います。このように訳すことによって、神の義はイエス・キリストの贖いによって完成されていますから、さらにこれに加えて、我々人間側の信仰をも必要とするというような、誤った解釈を防ぐのに役立つことになります。

たとえで言うならば、もしストレプトマイシンによって我々の結核が治ったならば、ストレプトマイシンによって治ったというでしょう。我々が飲むことによって治った、あるいは医者が注射することによって治ったとは言わないはずで、我々を救うすべての力は、イエス・キリストの贖いにあります。贖いは、すべての力を創ります。結核菌を殺すすべての力は、ストレプトマイシンが持っています。我々は、ただ飲むだけです。ワックスマン先生の努力によって発見されたストレプトマイシンが持つ結核菌を殺す力は、飲むという人間側の行為によって、その力はいささかもプラスされません。また、人がそれを飲む場合に、力を入れて飲んだ、あっさり飲んだ、そんな区別もありません。ただ飲みさえすればよいのです。

(P.160)

我々の信仰の確立

私は、この最も重大なロマ書の要約とも言うべき、また聖書全体の要約とも言うべきこの3章21 - 26節までの解釈が、東洋人によってなされる日を希望します。また、そのために、私のこの講解が少しく役立つことを祈ります。

私は前講で述べた「律法、道徳と無関係に」という内村先生の言葉によって、信仰が確立しました。今日学びました、

- (1) イエス・キリストの贖いによる神の義
- (2) すべて受ける者に、信じる者に向かっている、
- (3) またそれには何らの区別もない、

という、この三つの真理のどれか一つでも本当に分かったならば、我々の信仰は確立します。

祈る、今日のこれらの真理のうちどれか一つが、諸君の心を捉えんことを！

(P.167)